

## 報告2 アフリカ・ケニア訪問記

2月末に1週間、ケニアを訪問しました。首都ナイロビから車で1時間半ほどにあるティカで、ストリートチルドレンの支援活動をしている松下照美さんを訪ねるためです。海外出張が多い私も、さすがにアフリカは遠いと実感した一人旅でしたが、実際に現地の活動に触れることができ、充実した毎日でした。松下さんは、1996年にケニアの首都ナイロビに移住し、1999年にケニア政府より正式にNGOとして認可され、2010年にはティカに、子どもたちの家「モヨ・チルドレン・ホーム」を設立して、貧しい子どもたちの教育も含めた自立支援の活動を続けています。

松下さんとの出会いは、ある人の紹介で2014年のぱれっとの総会後に、現地の活動について話をさせていただいたことがきっかけでした。その後も折に触れて松下さんとの交流は続いており、今回の訪問が実現したのです。

### ●モヨ・チルドレンセンター

訪問前に私が想像していたこととは異なる経験の多い1週間でしたが、子どもたちの家で働いているスタッフのアフリカなまりの英語の発音が聞き取れ



【食事の準備】

ず、何を話しているのか理解できないこともその一つでした。自分の英語が通じないことに少なからず落ち込みましたが、何度も聞き直し、彼らも諦めずに繰り返し説明してくれる根気強さのおかげで、スタッフとの関係が深まりました。

ティカに滞在中は松下さんの自宅に泊めて頂き、日中は松下さんに同行して

活動の様子をつぶさに見せてもらい、夜は、昼間の訪問先について話を深めるなど、毎日行動を共にすることで松下さんの支援活動だけでなく、アフリカでの生活に対する考え方を知ることができたのは大きな学びでした。日本でも環境破壊反対が叫ばれながらも、水も電気も当



【勉強中】

たり前のように使える日常生活に慣れてきていることに気づかされることも少なくありませんでした。

1週間の滞在ではストリートチルドレンの問題を全て理解することはできませんでしたが、これまでの松下さんの計り知れないご苦労は十分に想像ができました。同時に、松下さんの強い信念と行動力が、スタッフの仕事に対する姿勢や、ホームに暮らしながら学校に通う子どもたちのキラキラした目や表情から見えたことも確かでした。

### ●ケニアの子どもたちと日本人の支援活動

ここに書ききれないほどの訪問の機会が与えられましたが、中でも、ホームで生きいきと生活をしている子どもたちがいる一方で、路上生活をしている子どもたちの現実を目の当たりにして強いショックを受けました。ティカやナイロビのスラム街で、行き場の無い子どもたちがシンナーを吸いながらうつろな目で座り込んだり、ウロウロしている様子に一瞬たじろいだ自分を恥じました。この現実をなんとかしなければと取り組んでいる松下さんは、路上の子ども達に「タルミ！」と声をかけられ、一人ひ

とりに笑顔でことばを交わす姿から、なんとも言えない温かさが伝わってきたのが今でも鮮明に思い出されます。

滞在中に、ナイロビにある2ヶ所の団体を訪問することができました。子どもたちの医療支援活動を運営しているNGOの「チャイルドドクター」、孤児やシングルマザーの支援活動を運営しているNGOの「マトマイニ孤児院」と併設されている「フェルト工房」です。どの団体も貧しい家庭の子ども達や、母子家庭に対してリハビリ等も含めた医療支援や、ものづくりを通して経済的な自立支援を長年続けています。そして、そこで受けた共通の印象は、日本人の女性からこの活動の方向性をしっかりと見据えながら活動に関わっていることでした。それは、表面的な同情ではなく、「彼らと共にいることの楽しさと、覚悟」を感じさせるものでした。

### ●スタッフとのミーティング

子ども達やスタッフとの交流を深めながら1週間の滞在はあつと言う間に過ぎ、帰国前にスタッフの考えをぜひ聞かせてもらいたいと、松下さんにミーティングを持つことを願い出ました。

3時間の話し合いの中で、子ども達が約束を守らず、注意をしても同じミスを繰り返す態度に日々葛藤しているスタッフの戸惑いが伝わってきました。それでも、自分の経験を通して、恵まれない子ども達を守りたいという使命感から、これからも様々な形で活動を続け広げていきたいという強い思いが感じられ、松下さんの撒いた種は着実に実っていることを確信しました。それを受けて、松下さんはすでに次の構想に取り組み始めています。私はこの新しい支援活動がこれからどのように広がっていくのかとても楽しみです！

(ぱれっとインターナショナル・ジャパン代表  
谷口奈保子)

### ◆◆◆「ぱれっと」谷口奈保子さんをお迎えして◆◆◆

私が谷口さんと初めてお会いしたのは2014年5月の帰国時の時でした。「ぱれっと」の総会後「チョコラ！」上映に続き谷口さんとの対談、「チョコラ！」監督の小林監督も一緒に。その後も谷口さんを通じて多くの新しい出会いを頂き、国際ソロプチミストから賞まで頂きました。そして谷口さんのケニア訪問が実現したのが今年の2月。トントン拍子とも思える速さと私も驚くほどの実行力。決めたらまっしぐら！同行者の都合で一人旅になった時も予定に変更なし。旅なれた谷口さんに私の無用な心配はいりませんでした。

ナイロビ到着の翌日からはびっしりのスケジュール。「ニュー・ホーム」の子ども達との交流に始まり、新しく購入した農地の視察、「ニュー・ホーム」の子ども達の母親が入所している女性刑務所訪問、スラム街やスラムの家庭訪問、ストリートの子どもの状況視察、給食支援などモヨの関わる幾つかの学校訪問等々、活動現場をご案内しました。更にナイロビにある日本人が関わっているNGOの活動見学もされました。イヨイヨ最後の日の空港へ向かう前の3時間、谷口さんのスタッフへの講義は本当に素晴らしいものでした！スタッフの食い入るような視線と次々に起きる質問。彼らのこんなに生き生きとした学ぶ姿を初めて見たような気がしました。私も久しぶりに学生に戻ったようでした。

谷口さんとの6日間、本当に有意義な日々でした。現場をご案内しながら、谷口さんの目を通して、改めて私が生きている現場を再確認しているようでした。谷口さんからの「ぱれっと」のお土産は、「TANIGUCHI NAOKO PALETTE CORNER」として展示し、折に触れて子ども達やお客様が見ています。

(モヨ・チルドレン・センター・松下照美)